

高校で何に出会うか、何に打ち込めるか

1月14日（水）

週末の最強寒波もありここ数日は1年で最も寒い時期（大寒）とされますが、気象データ上も1月26日～2月4日までが、最も寒くなる時期だと分かっています。今週末は大学入学共通テストも行われ1月下旬から私立大学、2月末には国公立の二次試験とハードなスケジュールが続きます。高校入試に向けては、1月末に私立高校出願終了（web）を予定しています。2月10日（月）には私立高校入試、2月16日（月）には公立高校推薦入試といよいよ中学校も受験シーズンに入っていきます。今日は高校入試の話題を提供します。生徒の未来について考える際、避けて通れないのが急速なグローバル化やA I（人工知能）化の影響です。グローバル化と同時に、人口減少により国内市場は縮小していくとの見通しから、日本企業は海外市場に活路を求めています。そのため、海外大学出身の日本人や日本の大学出身の外国人の新卒採用が増えるとみられます。また、A Iの能力が人間を超えるとされる2045年までには、多くの仕事がA Iに取って代われ、なくなるともわれています。また、企業の統廃合が激しくなり、「終身雇用制」が崩れつつある今後は、1企業で40年以上永年勤務できるとは考えにくいでしょう。同じ企業や業種の仕事で一生を終えられるとは限りません。いわば「二毛作」「三毛作」の人生が一般的になってくるのではないのでしょうか。そうすると、必要となるのは「方向を変える力」や「再び立ち上がる力」だと思います。環境や業種が変わっても、その中で自分らしさを生かせる働き方を見つけて、幸せに生き抜く力、「自分はどこでも生きられる」という自信とたくましさ、今後ますます必要になるのです。そのようなたくましさは、どうすれば身につくのでしょうか。ある新聞記事に次のような記事がありました。～ここから～ 男子校・女子校の卒業生（20歳代後半から30歳代前半）が、男女別学ならではの思い出や特徴について語り合うのですが、男女別学以前に、各学校の校風や理念、高校時代に打ち込んだことが、卒業生たちの「今」に分かちがたくつながっていることを感じました。たとえば高校時代、陸上競技に打ち込んでいた男性は、自身の故障の経験から整形外科医を志望したそうです。しかし、整形外科医の現場を見て雰囲気になじめないと感じた彼は、現在、趣味で陸上競技を続けながら大学院で医療に関連した行動経済学の研究に没頭しているといいます。また、別の女性は、理学療法士として一度就職したものの、もっと深く学びたいと大学院に入り直し、現在は小児科専門の理学療法士として活躍しています。彼女の母校は「自分とは何か」をつねに考えさせる教育が特徴で、その学びが、障がいのある子どもたちと向き合い、対話する能力を育ててくれたといいます。「自分の闇を語れなければ、子どもの心は開けない」「生徒たちの望みや意志が、泉のようにわいてくるのを待つ学校です」といった言葉が非常に印象に残っています。「何が近道か」「何が安全か」を先回りして教えるより、子どもの真の望みや意志が生まれるまで「待つ」ことが、今の教育に最も大切なことかもしれません。

